慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	佐々木俊次著 ロシア思想史：スラヴ思想の展開
Sub Title	History of Russian thought, by Shunji Sasaki
Author	田中, 明
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.8 (1960. 8) ,p.729(59)- 733(63)
JaLC DOI	10.14991/001.19600801-0059
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600801-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本書は、確かに「商業経済論体系」の名にふさわしい。それには商業学説があり、商業学の方法論があり、商業発達史があり、商業資本の理論があり、商業の現状分析がなされてあり、マーケティング論があり、社会主義社会の商業にまでおよんでいる。それは絶えず産業資本との関連を保ちつつ、商業資本独自の展開として研究されている。わが国のそれに触れる部分も少なくはなく、全体として、資本主義経済社会における商業への批判が強い。われわれは本書を通じて現段階の商業が、過去からいかにしておよんできたか、そしてそれが現にいかなる矛盾と問題点を孕んでいるかを知るであろう。

あらゆるものがそうであるごとく、本書も決して無欠点とはなしがたい。まず商業の発達過程や現実の記述に際し、具体的な数字・数表をより多く挿入すべきではなかろうか。これをしたならば、その主張はより一段と明確に容易に理解されうるであろう。ついで本書の第二の欠点は、いわゆる商業補助業あるいは補助商業と商業との関連の記述がほとんどないということである。なるほど本書では「商業の内容は、商品の運輸、保管、分割、選別、混合、仕上げ、包装などを含まない」(三一頁)とはしているけれども、しかし「商人ないし商業組織の実際活動が、売買とともに運輸、保管、分割、選別、混合、仕上げ、包装などを含むということは、否定することのできない事実としてこれを承認せざるをえない」(二八頁)ともされるのであって、特に商業の発達過程においては、これらとの関連も触れられる必要性が大なのではなかろうか。

資本主義の生成と発展の全過程を通じて、国家がそれぞれの時期に、きわめて微妙な役割をしていることは事実である。特に商業に関しては、産業資本の場合とは別に独特なる政策が展開されている。それはある場合においては商業統制であり、また他の場合には中小商業の保護政策ともなった。その他機に応じて各様の商業政策がとられているが、本書では、国家による商業政策の理論および実際に関し、触れるところがきわめて少ない。

商業はこれを大きく分ければ、国内商業と貿易となるのではなかろうか。この両者を同一に扱ってよいのだろうか。商業学としては、この両者の関係をいかに理解したならばよいのか。貿易は商業であるかないか。商業であるとしたならば、いかなる位置を商業および商業学内において占めるべきか。たとえば本書の独占段階の資本主義における商業について論述する個所で、植民地や後進国の貿易・輸出入問題には、決して明確なる記述がなされていない。先進諸国・強大国の国際経済社会における商業・貿易上の諸行為とその諸影響等々。つまり貿易の問題を抜いて、現代の商業の十分なる把握が可能であるかどうかということである。

本書の理論的内容以外にも、一つの問題点が残されている。それは理論記述の文体とその使用する文言についてである。それはマルクス経済学の書とはいえ、いささか陳腐の表現が多い。静かなる言葉で、静かなる態度のうちに述べられてこそ、その主張する真理は、よりよく、そしてより広く、読むものをして納得せしむるのではないだろうか。従来からのマルクス経済学は、この点に関し一種独特なる文言と表現をあまりに多く持ちすぎている。読むものをして、内容とは別に〝またか〟の感を沸かしてしまうのはその大なる欠点である。本書でもこの感は免れない。些細なことではあろうが。

さて本書は、その「はしがき」(一～六頁)において述べられているその使命を十分に果すものであろうと思われる。本書はたんなる商業の技術の解説や現象の記述だけのものではない。そこで述べられているものは「商業にかんする科学的な理論体系」(はしがきの三頁)である。「高い水準の理論」(はしがきの三頁)である。そして本書が森下二次也氏の編のもとに、茂木六郎、山本朗、橋本勲、風呂勉、荒川祐吉および井上幸一の諸氏によって分担執筆されたものでありながら、決して形式の不整や用語の不統一などに陥入らず、十分の調整がゆきとどいていて、各章の連結も円滑に、内容もよどみなく流れて、ここに共同著作の好成果を示されたことは、今後の学界の研究推進とその業績発表の方法の、将来を卜する一実例としても、高く評価できよう。本書の刊行を商業学者・学徒こぞってこれを喜ぶであろう。

(森下二次也編。序章、第三章第一節を森下二次也、大阪市立大学教授。第一章を茂木六郎、長崎大学助手。第二章を山本朗、大阪市立大学講師。第三章第二節以下を橋本勲、香川大学助教授。第四章を風呂勉、神戸商科大学講師。第五章、第六章を荒川祐吉、神戸大学助教授。第七章を井上幸一、松山商科大学助教授がそれぞれ担当執筆。はしがきが六頁、目次が八頁、本文が三九一頁、事項索引が九頁、参考文献目録が一五頁。文人書房。A5判。昭和三十四年九月二十日発行。五〇〇円。)

(庭田　範秋)

佐々木俊次著

『ロシア思想史――スラヴ思想の展開――』

佐々木俊次氏の「ロシア思想史」は、つぎの諸章よりなる大著である。

第一章　ロシアにおける社会革命思想の形成
第二章　スラヴ統一の志向と最初のスラヴ合同運動
第三章　スラヴ主義の創始者イワン・ワシリエヴィチ・キレーエフスキーと彼の思想
第四章　アレクセイ・ステパノヴィチ・ホミャーコフ
第五章　コンスタンチン・セルゲエヴィチ・アクサーコフ
第六章　スラヴャノフィールのスラヴ思想から汎スラヴ主義へ
　第一節　ユーリー・フェオドロヴィチ・サマーリン
　第二節　イワン・セルゲエヴィチ・アクサーコフ
　第三節　ミハイル・ニキフォロヴィチ・カトコフ

第七章　ニコライ・ヤーコヴレヴィチ・ダニレーフスキー
第八章　フィヨードル・ミハイロヴィチ・ドストエーフスキー
第九章　汎スラヴ主義から大ロシア主義へ
第一〇章　コンスタンチン・ペトロヴィチ・ポベドノスチェフとコンスタンチン・ニコラエヴィチ・レオンチェフ
第一一章　コンスタンチン・レオンチェフと「われわれの新しいキリスト」
第一二章　スラヴ主義の分裂に対する闘争と正統スラヴ主義復興
第一三章　ウラヂミル・セルゲエヴィチ・ソロヴィヨフと彼の思想
第一四章　東欧におけるスラヴ民族解放の思想と運動
第一五章　ソ連邦における全スラヴ運動

以上の構成にロシアにおけるスラヴ思想の展開が示されていると見てもよかろう。いずれにせよ本書の課題は著者がはしがきに表記されるごとく、ロシア思想史におけるスラヴ主義者＝スラヴァノフィールの思想の発展を跡づけることに在る。数百頁よりなるこの思想史はロシアの政治史・経済史にはじまり、スラヴの宗教史・哲学史にわけいる厖大な労作であるから、あまつさえ著者の指摘するごとく、一般的にロシアの思想家は、体系的に論述するよりも断片的に叙述することをこのみ、その生ける観念は実践とも分ち難く結び合うものとするなら、本書の全容は読者の理解をはるかに越えるものと云うべきである。しかしながら読者の理解が及ぶ限りにおいて概要を紹介し読後の感想を述べることは許されるであろう。

一九世紀のはじめにフランス革命の申し子が欧洲に旋きおこした動乱の嵐は、西欧諸国のみならず南欧東欧の社会に於ける民族意識の覚醒を促した。なかでも一八一二年のみぎりナポレオンの征露とその敗退は、永くかつ深くその後のロシアの社会的・思想的発展の道程に複雑な影を落したのである。祖国戦争を勝利にみちびいた愛国意識の高揚は、戦後におよんで一面においては、ロシアの西欧化に反撥しスラヴの固有性を主張して、古来の独裁制と農奴制の擁護につとめる神秘的で反動的な思潮にさおさす結果をもたらし、他面においてはこのような状況が、対仏戦争をとおして西欧思想の影響下におかれた貴族層、とりわけ将校よりなる貴族のグループを民族解放の旗の下に、専制政治の廃止をもとめるブルジュア民主革命の運動に駆り立てずにはおかない。かくして即位当初は啓蒙君主の聞えも高きアレクサンドル一世治下の四半世紀をつうじ、国内の思想的・社会的な対立はいちじるしく激化しながらもなお潜行し進展しつづける。なかんずくアレクサンドルがメッテルニッヒとの連繋を強化した神聖同盟の復古時代においては、啓蒙君主の改革ごのみが官僚専制の反動に道を拓くのみか、ついにはニコライの皇位継承に暗黒政治の復活が予告されたのである。それゆえ農奴解放の主張や、憲法制定の要求に代表せられる、国家的ないしは社会的変革をめざすすべての努力は、必然的に急進的な、軍事的行動にたよる政治的結社の組織に集中せられた。二五年一二月デカブリストの蜂起とその壊滅は、独裁政治のもとにめばえた秘密結社の目覚ましくも薄命な革命の火花であった。かれらはスラヴ民族の解放のためのロシア国家の改革について広汎に論議しながら、なおかつ重大な問題たとえば国家形態や土地分与の問題について意見をことにし、それゆえに十二月党のすべての秘密結社すなわち北方同盟ならびに南方同盟の相互の見解も、あるいは南方同盟のなかの連合スラヴ協会と同盟の見解もことなり、連合スラヴ協会のうちにすら意見の一致はみられない。しかしながらデカブリストの抽象的なロシア救済の思想はそのために、ロシアの西欧派からスラヴ主義者に至るその後の社会思想の発展過程に、具体的に再現され体系的に展開されたのである。しかりとすればロシア愛国主義としてのスラヴ主義思想も、その思想的源泉をば十二月党員の運動のうちに有することは明らかである。しかして連合スラヴ協会のうちに、ロシア国家の変革にもとづきスラヴ民族の統合をもとめる思想の萌芽があらわれる。絶対主義の官僚国家をくつがえして、農奴制ロシアの人民を解放することなしに、被圧迫スラヴの民族を解放することも、ロシアを盟主にスラヴの連邦を結成することも出来ないからである。それゆえにまた連合スラヴ協会も、帝政ロシア国家の内政改革をめざして絶対王政に挑戦し、その弾圧にたおれたのである。

デカブリストの検束にはじまるニコライ一世の統治は、政治においては圧制の、思想史においては内面的に自由の時代をもたらした。ニコライ・ロマノフがすべての自由な思想を嫌悪したにも関らずその公の解釈によれば、きわめて穏健なドイツの学問のロシアの大学にたいする影響はこれを如何ともしがたく、保守的なベールの下に革命的な世界観を孕むヘーゲル哲学の支配のもとにロシアの知識層を委ねたのである。いずれにせよヘーゲル哲学の浸透は、マルクス主義の土壌を豊かならしめた因であろう。はやくも一九世紀の二〇年代アレクサンドル一世の治下において、モスクワ大学の思潮はフランス啓蒙哲学より転じてドイツ観念論に向いヘーゲル・シェリング時代の到来を迎えた。その後の三〇年代から四〇年代に掛けて、モスクワには二つのグループが現われ互いに関係を保ちながらも独自の道を歩むのである。その一つはアレクサンドル・ゲルツェン（一八一二―一八七〇）の指導のもとに団結し、ヘーゲルをこえてフランスの唯物論的な社会主義にすすむ。一つの流れはニコライ・スタンケヴィチ（一八一三―一八四〇）の許に集まり、左翼にバクーニン、ベリンスキー、ツルゲーネフ、グラノフスキーを包容しつつも、なおその右翼にはキレーエフスキー兄弟、ホミャーコフ、アクサーコフ兄弟、サマーリンらを包括していたのである。一九世紀の四〇年代スタンケヴィチなきあとゲルツェンのもとに、前者の主なる者は左傾して西欧主義にもとづく革命思想に身を委ねた。元来ヘーゲル右派よりなる後者はさらに右傾して、イワン・キレーエフスキー（一八〇六―一八五六）、アレクセイ・ホミャーコフ（一八〇四―

一八六〇）の周囲に集結し、ヘーゲルをこえてシェリング後期の哲学にいたり、シェリング同一哲学の神秘主義にもとづいて、ロシア固有の宗教的・哲学的なスラヴ主義の体系を打ち立てたのである。ニコライ一世時代における産業革命の進行は新しい生活のための新しい理念にたいする摸索をうながす。ロシアのスラヴ主義者も西欧派も、ひとしく西欧の思想にまなび自国の現状を否定し批判しながら、祖国の過去がもつ意義および価値、ならびに未来の展望について解釈をことにし抗争をつづけたのである。西欧派が現実的に、国家を教会にむすびつけるニコライ帝政に反対しギリシア正教を否定したのにはんし、スラヴ主義者はロマン主義的に、現実を否定するかたわらロシアの固有性をロシアの共同体に、正教の信仰と神政主義の独裁政治にみいだした。しかしながらスラヴ主義者による、ふるきロシアの理想化と正教の讃美は現状の批判につらなり、それゆえにキレーエフスキーもホミャーコフも当局の厳しい禁圧を受けたのである。ニコライ一世時代の抑圧政治は、ついにキレーエフスキーをして神秘主義より静寂主義に逃れしめ諦観のうちに俗界を去らしめた。しかしてホミャーコフはかれの亜流のごとく偏狭な国粋主義に陥ることなく理想主義を保ちつづけて、クリミア戦争における ニコライ皇帝の敗北を神に感謝しながらも改革の目をまたずに生涯を終った。その後の農奴解放に際して、ユーリー・サマーリン（一八一九―一八七六）やイワン・アクサーコフ（一八二三―一八八六）の輩が為し得た事は、共同体の擁護にもとづく独裁制の弁護をつうじて、絶対王政による上からの土地改革に力を貸すことではなかったか。

一八六一年・農奴制廃止の宣言について一八六三年・ポーランド革命の鎮圧、それより一八七七―八年の露土戦争にかけて、これらの現実派は理想派の微弱な抵抗をおしのけ、スラヴ博愛協会の美名にかくれてロシア帝国主義の野心を煽動しつづけた。このときに西欧派はその民主主義の革命理論により、西および南スラヴ諸民族の解放運動に貢献したのである。改革の時代に先立つ初期スラヴ主義思想の観念的にして哲学的な理想主義は、年毎に色褪せて俗流に歪曲され被圧迫スラヴ諸民族の大ロシア化の策謀に堕落した。ニコライ・ダニレーフスキー（一八二二―一八八五）の文化史類型論があらわれて、ツァーリズムの政治的膨脹論をちからづけ、スラヴ主義思想の政治体系を普遍的・哲学的に基礎づけるものと喧伝されたのである。これにたいしてスラヴ主義者の批判者であるために、後継者でもありえたウラヂミル・ソロヴィヨフ（一八五三―一九〇〇）は、国粋的な民族主義と排外的な愛国主義の大勢に烈しい抵抗を試みたのである。しかしながらアレクサンドル二世が暗殺されアレクサンドル三世が即位した、一九世紀の八〇年代におよび汎スラヴ主義はついに大ロシア主義に転化した。この時代に暴威を逞しくした者は、西欧派の保守派よりでた国家主義の政治記者ミハイル・カトコフ（一八一八―一八八七）、西欧化された西および南スラヴ諸民族を排斥しアジア諸国の併合をとなえ、それゆえスラヴ主義を脱してアジア主義に転じた虚無主義の神政論者、コンスタンチン・レオンチェフ（一八三一―一八九一）らであり、さいごにアレクサンドル三世ならびにニコライ二世につかえ、レオンチェフの理論を実践にうつした教権主義的・独裁政治家、コンスタンチン・ポベドノスチェフ（一八二七―一九〇七）がある。かれは一八八〇年から一九〇五年まで、宗務院長の職に在り露国皇帝の大ロシア化政策に影響をおよぼした。ともあれこの時代以後の国粋主義はもはやその思想内容において、かつてのスラヴャノフィールの精神を基調とするものではない。スラヴ主義の理想的側面は帝政ロシアの歴史的限界を越えるものであり、保守的側面が常にこの国の経済的膨脹と結びついて現われたのであった。しかして現代のソ連邦における全スラヴ運動は帝政ロシアの汎スラヴ主義から峻別さるべきであろう。

本書の概要を要約すれば以上である。しかも本書の内容は評者が概説したほど一面的でもなければ公式的でもない。もとより本書の特質は、スラヴ主義者の思想の展開をロシアの西欧派のそれとの絡み合いにおいて、具体的に研究し実証的に分析したことにある。なおそのことがロシアにおけるスラヴ主義思想の本質規定について、いくらか曖昧な論点を残したとしてもあえて責むべきことではない。問題の焦点は、前世紀ロシアにおけるスラヴ主義の本質はなにか、であろう。評者の疑問はつぎの点に懸る。スラヴャノフィールの思想の本質を、私は初期スラヴ主義に求むべきであろうか。大ロシア主義のうちには求め難いとしても、汎スラヴ主義のうちには求め得ないのであろうか。農奴解放をさかいに改革以前のスラヴ主義思想に重点をおくか、それとも改革以後のスラヴ主義思想を重視すべきであろうか。前者の場合にはザーバドニキとの関係において、後者の場合にはナロードニキとの関連において、いっそう厳密にスラヴャノフィールの思想の歴史的性格ないしは階級的本質が規定されえないであろうか。

以上の諸点について本著者の説明が充分に説得的ではない様に思われるのである。（地人書房・A5・五五六頁・一二〇〇円）

（田中　明）